The Henry James Society of Japan

Newsletter

No. 1　August 28, 2021

ご挨拶

水野尚之

2021 年 4 月、コロナ禍のさなかに日本ヘンリー・ジェイムズ協会が呱々の声を上げました。設立の日は、ジェイムズの誕生日の 4 月 15 日とされました。本協会の発足までには実に長い年月が経過しました。ジェイムズはアメリカ文学のキャノンと言われる作家の一人ですが、この作家の名を冠した学会がこれまで日本で生まれなかったのは不思議なほどです。難解をもって知られる作家ゆえ、明治以来、様々な読書会や研究会が各地で開かれてきたことは想像に難くありません。その中でも、別府恵子先生、海老根静江先生、里見繁美先生が中心となり、これまで 9 回にわたって毎年開いてこられたヘンリー・ジェイムズ研究会が、本協会設立に極めて大きな役割を果たされたことを、ここに感謝を込めて記しておきたいと思います。また、難波江仁美先生をはじめとする先生方のご尽力により、国際ヘンリー・ジェイムズ協会の大会が 2022 年 7 月上旬に京都で開催されることが決定したことも、本協会設立の機運を高めました。

こうして日本ヘンリー・ジェイムズ協会が発足しましたが、作家の名を冠した他学会の活動の歴史を見る時、本協会の果たすべき役割は大きく、また課題も多いと思われます。もちろん個々の研究者がヘンリー・ジェイムズという作家についてこれまで様々な形で優れた成果を挙げてこられたという事実については、私などがわざわざ言うまでもありません。ただ、ホーソーンなどの先輩作家との比較がなされることが多かったのに対して、ジェイムズと同時代のハウエルズやトウェインとの比較研究はあまりなされてこず、ウォートンとジェイムズを比較することはあっても、ジェイムズと同時代に雑誌を賑わせた「地方色」作家などとの関係については、少なくとも日本ではほとんど論じられてきませんでした。さらには、アメリカ人として生まれたジェイムズと、フランス文学、ドイツ文学、日本文学といった「外国」文学とのかかわりについても、今後さらなる研究の深まりが期待されます。

生まれたばかりの学会ではありますが、日本ヘンリー・ジェイムズ協会が果たすべき役割は決して少なくないはずです。また、隣接する他学会との連携が必要であることは言うまでもありません。先達たちがこれまで築いてこられたジェイムズ研究の偉大な伝統を本協会が継承し発展させていくために、また本協会が後進の研究者たちを育てる場となるために、皆様どうかご協力くださいますよう、切にお願い申し上げます。

来し方行く末

海老根静江

2021 年 5 月 29 日の Zoom 形式による会合があり、9 年余り続いたヘンリー・ジェイムズ研究会は学会化されて日本ヘンリー・ジェイムズ協会になることが決まりました。来年には国際大会が京都で行われることも決まっています。会合のあとに編集委員会より研究会時代の資料が送られてきてこの会の「来し方」をふりかえることになりました。

第 1 回研究会は 2011 年に行われています。東日本大震災の年で、東京ではまだ余震が続いていて、計画停電もあり、全体に暗い感じだった頃、駅（品川だったか高輪だったか）近くのフルーツパーラーで別府恵子、里見繁美両氏と研究会発足についてご相談したことを思い出しました。ジェイムズの翻訳も研究も以前から方々で行われていましたし、学会発表やシンポジウムは毎年ありました。またホーソーンをはじめ英米文学の個人作家学会が数多く誕生していて、なぜジェイムズの学会がないのかという声もむしろ他の学会の方たちから聞こえてきましたが、ジェイムズに関してはとくに個別学会を作らなくても不自由を感じない時代が長かったように思います。むしろないほうがジェイムズらしいとも言われていました。しかし大学や学会の状況がいろいろと変化してきて作ってもいいのではないかという話が高まっての研究会誕生でした。

私は大学院での上田勤先生の授業でジェイムズへの関心が深まり、行方昭夫氏や氏の属されていた読書会グループの方たちともいくらかのお付き合いがありました。また卒業後数年間関西で暮らすことになって、関西のジェイムズ研究者の方々の存在を身近に感じるようになり、とりわけ別府先生とは親しくして頂いていたので、研究会立ち上げの際に前述のお話合いを持ったのだと記憶しています。

その年の 8 月には早速研究会が開かれたのですが、会が出来てみると、はじめから楽しく親しみやすく、またジェイムズ研究の情報交換の場としてとても有益であることがわかりました。プログラムの形が自然にできあがり、とりわけみんなで同じテクストを読んできて論じあうという企画は研究発表とも読書会とも違う面白い試みで、ご承知のように研究会の目玉としてずっと続いてきました。

もう一つ期待以上だったのは最初に神戸が引き受けてくださってから、関西 3 回、東京 3 回、北九州、佐賀、松江各 1 回というように（コロナがなければ北海道でも 1 回行われるはずでした）毎年の会がいろいろな地域の大学で開かれていったこと。おひとりですべてお世話をしてくださったところもあり、大変だったと想像しますが、毎回充実感の残る楽しい集まりとなりました。

また国際ジェイムズ学会に加わった方からの報告コーナーがあったのも有益でした。国際学会の古くからの世話役ともいうべきザカライアス氏は早くから日本の研究会の学会化を期待されていたと聞いています。私はやむをえない事情で参加できなかったのですが、松江での研究会にはザカライアス氏も参加され、充実した研究会のあと別府先生が車で出雲大社までご案内されたと伺っています。このような研究会メンバーの国際学会との関係があって、その後難波江仁美氏がヘンリー・ジェイムズ国際学会役員に就任され、日本での大会開催が実現することになったと思います。研究会の学会化、国際化は、私が大好きだったこれまでの自然体でのどかな雰囲気を少し失わせるかもしれませんが、会の発展は嬉しくおめでたいことに違いありません。

ジェイムズ研究に多大な影響を及ぼしたイヴ・K・セジウイックをお茶の水女子大学がお招きしたとき（ちなみに招聘の中心になったのは竹村和子さんで、セジウイックも竹村さんもその後まもなく若くして亡くなってしまったのは痛恨の極みです）セジウイックさんに日本の若いひとたちの事務能力、会の運営の手際の良さをとても褒められたことを思い出します。これからは有能な会員のみなさまの力により、ヘンリー・ジェイムズ協会も、来年の国際大会も立派に運営されていくことと期待しています。

ヘンリー・ジェイムズ協会 Newsletter, No.1 刊行によせて

別府恵子

Happy Birthday!

時みちて、2021 年 4 月、日本ヘンリー・ジェイムズ協会（The Henry James Society of Japan）設立の運びとなった。「ヘンリー・ジェイムズ研究会」のみなさんと喜びを分かち合いたい。振り返れば、最初、谷本泰子氏を中心とした「読書会」が事の起こりだと理解する。私が関わりあったのは、いまから 10 年あまりまえ、里見繁美氏の要望を受け、海老根静江氏に声をかけて始まったのが、「ヘンリー・ジェイムズ研究会」だった。それ以降、毎年夏、隔年ごとに関西、関東地区に会場を設定して、志を同じくするアメリカ文学研究者 20〜30 人が集まり、有志による研究発表、特定のテーマでのシンポジウム、短篇精読、時にはジェイムズ作品の映画鑑賞など多彩なプログラムで、「ジェイムズ研究会」が開催されてきた。

「研究会」10 年余りにおよぶ歩みの詳細は他に譲るとして、この場をかりて、ジェイムズとの個人的な関わりを話したいと思う。

****

The Portrait of a Lady、Isabel Archer とともに

人であれ、場所であれ、あるいは書籍であれ、初恋の相手を忘れることはない。もうすでに半世紀以上まえ、私が大学一回生の夏休み、京都四条河原町に店を構え、洋書を広く扱っていた「丸善書店」で、偶然目に入ったのが、Modern Library Edition の *The Portrait of a Lady* だった。 正確には、*The Portrait* が、「手にとってみてごらん！」と語りかけていたといった方がより適切であろう。著者名でなく、タイトルに惹かれて手にした一冊。ヒロインのイザベルに自らを重ねて分厚いペーパーバックを夢中で読破した記憶がある。

その夏は、Melville の *Moby Dick*、Thackeray の *Vanity Fair: A Novel Without a Hero*、Hardy の *Tess of the d'Urberville*、そして Maupassant は *Une Vie* とまさに、多読、乱読もよいところだった。『白鯨』は別として、ヒロインそれぞれが遭遇する人生における“much ado”に共鳴、あるいは反発しながら読んだ遠いむかしのことである。

こうした、贅沢(リベラル)な乱読が可能だったのは、私が受けた当時の文学部英文学科の枠にと

らわれない自由(リベラル)な教育のおかげだった。*OED* と首っ引きでテクストと向きあっての精読ではなかった。それが後々、研究者として良かったか悪かったか、いまもってわからない。将来、英米文学研究をキャリアにするとは夢想さえしなかったのだから。

学部の卒業論文にはVirginia Woolfを取り上げた。二回生時の教科「英国小説」のテクストだった *Mrs. Dalloway* をはじめウルフ文学の流麗な文体に惚れ込み、彼女の評論、*A Room of One's Own*、*Three Guineas* で披瀝、展開されるフェミニズム思想、その哲学に共感したからである。そのウルフへの思い入れは現在も続いている。

大学一回生の夏に出会った *The Portrait of a Lady* との再会は、1966 年秋、ミシガン大学大学院(Horace Rackham School of Graduate Studies)に入学（1966-68、1970-73）した時、10 年の歳月が経っていた。Austin Warren*教授のアメリカ文学プロゼミナーで、ヘンリー・ジェイムズの作品（*Roderick Hudson, Washington Square, The American, The Europeans*）を読む機会に恵まれる。ニュー・ヒストリシズムが話題になり始め、ディコンストラクション、フェミニスト・クリティシズムなどまだ新しく、依然として、ニュー・クリティシズムが幅をきかせていた批評理論の「エイジ・オブ・イノセンス」時代。ウォレン教授には、René Wellek との共著 *The Theory of Literature*（1942）があり、自らを"old New Critic"と任じる学者で、個性的な講義スタイルが懐かしい。

アナーバーの冬は、学生たちが滑りあるく積雪の道路が細長いスケート・リンクと化す。ウォレン氏は凍てついた道路で転倒、腰を骨折され入院。残念なことに、最後の受講生の一人となった。後任者は Lyall H. Powers*氏で、ジェイムズ後期の長編のほか、*The Bostonians*、*The Princess Casamassima* が取り上げられる。彼は *Henry James and the Naturalist Movement* を執筆中で、Balzac, Zola, Daudet, Goncourt 兄弟、Maupassant らがリーディング・リストに追加された。(記憶が薄れ再読を余儀なくされたが、むかしの乱読が幸いしたと思う。)

結局のところ、博士論文のテーマにはジェイムズを取り上げ、*The Educated Sensibility in (the Works of) Henry James and Walter Pater*（1973）を執筆、帰国。母校の文学部英文学科の教員として復職を果たした次第。1979 年、薦めがあって、博士論文を英文のまま、松柏社より出版できることになる。それが、契機だったかは定かでないが、翌年 1980 年、日本英文学会全国大会でのシンポジウム「『ある婦人の肖像』を読む」で、司会の行方昭夫氏、大津栄一郎、海老根静江諸氏とご一緒する機会に恵まれた。

それから、母校でアメリカ文学史、アメリカ小説、現代アメリカ詩などの教科を担当して 30 年、あっという間の時が流れた。そのあいだ、ジェイムズ長編小説のなかで、もっとも多く取り上げたのが *The Portrait of a Lady*。交換教授として赴任した Michigan State University（East Lansing）でも、*Washington Square*、*The Portrait* をテクストに取り上げた。予期されたように、小説の最後、イザベルの決断に疑義を唱える学生は一人ではなかった。

必然のこと、最終講義*に選んだテーマは、*The Portrait of a Lady*。忘れたことのないヒロイン、イザベル"the lady"。数多いジェイムズのヒロイン(ヒーロー)のなかで、私イチ推しの人物でありテーマである。なぜなら、イザベルは等身大の生身の人間であるから。フィクションのなかの人物でなく現実の生を「享受」＝"suffer"する一人の人間。私たちと同様に、ジェイムズは「話」の終わりでイザベルを退場させはしない。

最近はやりの「それから物語」として、イザベルのその後を書いた John Banville の *Mrs.*

Osmond (2017)が話題になっている。未読だが、いまは読む予定はない。ジェイムズの最高傑作 *The Portrait of a Lady* に関しては、秀逸の評伝、Michael Gorra 氏の *Portrait of a Novel: Henry James and the Making of an American Masterpiece* (2012)を強く推奨したい。(2021 年 7 月 23 日)

注：* Austin Warren (1899-1986). 上記以外にも、*The Elder Henry James* (1934)、*The New England Conscience* (1966)などの著書がある。

* Lyall H. Powers (1924-2018). *Henry James and the Naturalist Movement* (1971)、*The Complete Notebooks of Henry James* (with Leon Edel, 1987)、*Alien Heart: the Life and Work of Margaret Laurence* (2003)などの著者。

* Keiko Beppu.「*The Portrait of a Lady* との 40 年——ジェイムズの書かなかったこと/言わなかったこと——」『神戸女学院大学論集』第 46 巻、第 1 号(1999 年 7 月)。

ヘンリー・ジェイムズ研究会のあゆみ

2011 年～2019 年

第 1 回

日時：2011 年 8 月 27 日（土）13:00-17:00

場所：神戸研究学園都市大学交流推進協議会 UNITY

プログラム

1．「初めての翻訳体験」

李春喜

2．“Transforming Henry James”（ジェイムズ学会報告）

別府惠子

3．読書会：“The Liar”(1888)

進行役：難波江仁美

＊＊＊＊＊

第 2 回

日時：2012 年 9 月 1 日（土）13:00-17:00

場所：青山学院大学青山キャンパス

プログラム

1．研究発表：「「この次こそは (“The Next Time”) 」(1895) における欲望の三角形」

町田みどり

2．報告：「うれし恥ずかし物語：若き日のジェイムズの匿名小説（？）試し読み」

福田敬子

3．読書会：“The Story of a Masterpiece”(1868)

進行役：里見繁美

＊＊＊＊＊

第 3 回

日時：2013 年 8 月 31 日（土）13:00-17:00

場所：神戸研究学園都市大学交流推進協議会 UNITY

プログラム

1．研究発表：「南北戦争とジェイムズの“obscure hurt”」

名本達也

2．講演：「ヘンリー・ジェイムズの当たり年―2012 年ジェイムズ研究雑感―」

海老根静江

3．報告：「東ヨーロッパの Jamesians：ポーランド第一回ヘンリー・ジェイムズ国際学会報告」

別府惠子

4．読書会：“The Beast in the Jungle”(1903)

進行役：中村善雄

＊＊＊＊＊

第 4 回

日時：2014 年 8 月 30 日（土）・31 日（日）

場所：北九州市立大学小倉サテライトキャンパス

プログラム

8 月 30 日（土）13:00-18:00

1．研究発表：「実人生と創作―彫刻家、トーマス・クロフォードと『ロデリック・ハドソン』―」

北原妙子

司会：水野尚之

2．講演：「中期短編群におけるジェイムズの文化批評―作家物語を中心に―」

町田みどり

司会：堤千佳子

3．報告：「“The Real Thing: Henry James and the Material World”―2014 ヘンリー・ジェイムズ国際学会報告―」

難波江仁美

4．ディスカッション：“The Jolly Corner”(1908)

- 読書会

進行役：中井誠一

- 映像作品鑑賞（約 40 分）

進行役：中井誠一・齊藤園子

8 月 31 日（日）9:30-12:30

1．ワークショップ：「*What Maisie Knew*：映画と原作」

進行役：難波江仁美

＊＊＊＊＊

第５回
日時：2015 年 8 月 29 日（土）・30 日（日）
場所：一橋大学・佐野書院

プログラム

8 月 29 日（土）13:00-17:30
１．研究発表：「ヘンリー・ジェイムズの「幽霊」たち」
松井一馬
司会：町田みどり
２．シンポジウム：「ジェイムズを取り巻く人びとと翻訳」
講師：別府惠子、水野尚之、中川優子
コメンテーター：海老根静江
司会：北原妙子
３．読書会：“The Altar of the Dead”(1895)
進行役：加茂秀隆

8 月 30 日（日）9:30-12:00
１．映画鑑賞会とディスカッション：
“La Chambre Verte”(1978)
進行役：中井誠一

＊＊＊＊＊

第６回
日時：2016 年 9 月 3 日（土）・4 日（日）
場所：京都大学吉田キャンパス、芝蘭会館別館

プログラム

9 月 3 日（土）
１．雑話：「アメリカ人とパリ―1900 年前後を中心に―」(13:10-13:40)
里見繁美
司会：別府惠子
２．研究発表：「若き日のヘンリー・ジェイムズを追って」(13:45-14:25)
齊藤園子
司会：堤千佳子
３．読書会：“In the Cage”(1898) (14:40-15:40)
進行役：松浦恵美
４．シンポジウム：「ヘンリー・ジェイムズと絵画」(15:50-17:30)
講師：難波江仁美、中井誠一、砂川典子

9 月 4 日（日）
１．*The Bostonians* の映画鑑賞とディスカッション (9:15-11:30)
進行役：中井誠一

＊＊＊＊＊

第７回
日時：2017 年 9 月 2 日（土）・3 日（日）
場所：佐賀大学本庄キャンパス

プログラム

9 月 2 日（土）
１．研究発表：「ヘンリー・ジェイムズと中間的帰属意識 (“inbetween-ness”) の問題―“A Round of Visits”を中心に―」(13:30-14:10)
竹井智子
司会：別府惠子
２．報告：国際学会参加報告 (14:10-14:30)
難波江仁美
３．シンポジウム：「リアリズムをめぐる戦い―ジェイムズとハウエルズの小説観―」(14:40-16:40)
講師：水野尚之、砂川典子、吉田明代

9 月 3 日（日）
１．読書会：“The Friends of the Friends”(“The Way It Came,” 1896) (10:00-11:10)
進行役：松井一馬

＊＊＊＊＊

第８回
日時：2018 年 9 月 1 日（土）・2 日（日）
場所：一橋大学・佐野書院

プログラム

9 月 1 日（土）
１．研究発表：「ヘンリー・ジェイムズとグローバリゼーションにおける倫理」(13:30-15:00)
松浦恵美
司会：海老根静江
２．国際研究交流報告：アフェクト理論 (15:10-15:30)
齊藤園子
司会：北原妙子
３．行方昭夫先生特別講演 (15:40-17:00)
「ジェイムズ翻訳の舞台裏―『ヘンリー・ジェイムズ、いま』「ジェイムズ学事始」で紹介した読書会の再現―」
司会：町田みどり

9 月 2 日（日）
１．読書会：“The Real Thing”(1892) (10:00-11:30)

進行役：小島尚人

＊＊＊＊＊

第９回
日時：2019 年 8 月 31 日（土）・9 月 1 日（日）
場所：島根大学松江キャンパス

プログラム

8 月 31 日（土）

１．雑話（パート 2）：「ロンドン・チェルシー地区の有名人たち―ヘンリー・ジェイムズの周辺を中心に―」(13:30-14:10)

里見繁美
司会：別府惠子

２．研究発表：「*Watch and Ward* におけるローマ」(14:15-14:55)

齊藤園子
司会：藤吉知美

３．研究発表：「「どこにも」から「どこでも」へ―ニューヨーク版後のジェイムズの作品をめぐって―」(15:00-15:40)

竹井智子
司会：町田みどり

４．読書会：“The Pupil”(1891) (15:50-17:20)

進行役： 砂川典子

9 月 1 日（日）

１．小泉凡先生特別講演会 (10:00-11:10)
「ラフカディオ・ハーンをめぐる日米交流史―没後の社会的影響を中心に―」
質疑応答 (11:10-11:30)

司会：中井誠一

※　両日の特別ゲストは、*The Henry James Review* 編集長の Greg Zacharias 氏。

ヘンリー・ジェイムズ関連書誌

2016 年～2021 年

１．研究書・書誌

後川知美『ヘンリー・ジェイムズの小説観と道徳意識』デザインエッグ社、2018 年。

斎藤彩世『境界を持たない愛――ヘンリー・ジェイムズ作品における同性愛をめぐって』松籟社、2019 年。

別府惠子『「聖母子像」の変容――アメリカ文学にみる「母子像」と「家族のかたち」』大阪教育図書、2019 年。

２．翻訳　ヘンリー・ジェイムズによる小説、戯曲の日本語訳。

水野尚之（訳）『ガイ・ドンヴィル』大阪教育図書、2018 年。

齊藤園子（訳）『後見人と被後見人』大阪教育図書、2019 年。

３．論文

中村善雄「電信とタイプライターの音楽と駆動する情動――メディア・テクノロジーに囚われしジェイムズ」『身体と情動：アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』竹内勝徳、高橋勤編、彩流社、2016 年、145–62 頁。

Saito, Sonoko. “The Materiality of Ghosts in ‘The Bench of Desolation’ (1910): An Exploration of the Pocket Metaphor.” *Litteraria Copernicana*, no. 21, 2017, pp. 61–73.

竹井智子「言語と身体の「奇妙な融合」――ヘンリー・ジェイムズ自伝における南北戦争を巡る語り」『フォーラム』No. 22、2017 年、1–18 頁。

竹井智子「ヘンリー・ジェイムズと記憶のかたち――「喪服のコーネリア」に穿たれた穴」『英米文化』No. 47、2017 年、63–80 頁。

Nabae, Hitomi. “The Absent and Disinterested Other: Henry James’s Experimental First Person Narrative in ‘The Ghostly Rental’ (1876).” *Litteraria Copernicana,* no. 21, 2017, pp. 21–35.

別府惠子「ヘンリー・ジェイムズの人種認識 ：「ホワイトネス」を書く――旅行記『アメリカの風景』(1907) と後期小説をめぐって――」*AALA Journal* 第 23 号、2017 年、53–66 頁。

松井一馬「メイジーのグレート・ゲーム：『メイジーの知ったこと』におけるオリエントの表象」『日本アメリカ文学会東京支部会報　アメリカ文学』第 78 号、2017 年、1–8 頁。

小島尚人「ギルバート・オズモンドはどこ出身か――*The Portrait of a Lady* と南北和解のナラティブ」『英文學誌』第 60 号、2018 年、39–56 頁。

斎藤彩世「*Washington Square* における遺産相続と父の喪失」『アメリカ文学研究』第 54 号、2018 年、5–23 頁。

中村善雄「文化装置による意識の変容――ジェイムズの『使者たち』における幸福の行方」『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』貴志雅之編、金星堂、2018 年、311–30 頁。

福田敬子「伏魔殿の妖怪たち――アメリカ人国籍離脱者たちのロンドン・クラブバトル」『憑依する英語圏テクスト――亡霊・血・まぼろし』福田敬子、上野直子、松井優子編、音羽書房鶴見書店、2018 年、103–30 頁。

松浦恵美 「「彼のためにろうそくを」――ヘンリー・ジェイムズ「死者たちの祭壇」におけるアメリカ金融資本主義、親密圏、許し」『アメリカ研究』第 52 号、2018 年、135–56 頁。

水野尚之「Twain, Howells, James と発表メディア」『マーク・トウェイン　研究と批評』第 17 号、2018 年、11–25 頁。

北原妙子「ヘンリー・ジェイムズとイタリア：西洋におけるエキゾティック表象」『国民国家（ネイション＝ステイト）と文学――植民地主義（コロニアリズム）からグローバリゼーションまで』庄司宏子編、作品社、2019 年、215–51 頁。

Saito, Sonoko. “The Figure *In the Cage*: Reader and Writer in Henry James.” *The Journal of the American Literature Society of Japan*, no. 17, 2019, pp. 55–72.

齊藤園子「喜劇のアメリカ人――ヘンリー・ジェイムズの『アメリカ人』の小説と戯曲をめぐるトランスナショナルな葛藤」『北九州市立大学外国語学部紀要』第 149 号、2019 年、29–57 頁。

Takei, Tomoko. “Pain and the Possibility of Spaces Between: Henry James’s Last Tale.” *The Journal of the American Literature Society of Japan*, no. 17, 2019, pp.73–89.

竹井智子「読むことと書くこととヘンリー・ジェイムズの『過去の感覚』」『精読という迷宮――アメリカ文学のメタリーディング』吉田恭子、竹井智子編、松籟社、2019 年、139–64 頁。

中村善雄「四次元思想と時空を巡る文学的想像力――タイムトラベル物語としての『過去の感覚』」『エスニシティと物語り――複眼的文学論』松本昇監修、西垣内

磨留美、君塚淳一、中垣恒太郎、馬場聡編、金星堂、2019 年、305–17 頁。
中村善雄「ローウェル、フィールズ、ハウエルズの編集方針——『アトランティック・マンスリー』誌に見る知的コミュニティの形成」『繋がりの詩学——近代アメリカの知的独立と〈知のコミュニティ〉の形成』倉橋洋子、髙尾直知、竹野富美子、城戸光世編、彩流社、2019 年、309–28 頁。
Nabae, Hitomi. “Traveling Curios in a Playful Spirit: Henry James’s American Museum.” *Henry James’s Travel*, edited by Mirosława Buchholtz, Routledge, 2019, pp. 82–100.
Beppu, Keiko. “Claims of Art and of Social Duties: Hyacinth’s Choice in *The Princess Casamassima*.” *Reading Henry James in the Twenty-First Century: Heritage and Transmission*, edited by Dennis Tredy, Annick Duperray, and Adrian Harding, Cambridge Scholars Publishing, 2019, pp. 261–68.
松浦恵美 「ほんもの? ——ヘンリー・ジェイムズ「ほんもの」における真正性」『日本大学芸術学部紀要』第 71 号、2019 年、81–89 頁。
水野尚之「『ガイ・ドンヴィル』とその後の劇」『アメリカ演劇』第 30 号、2019 年、16–27 頁。
水野尚之「リアリズムをめぐる戦い——ジェイムズとハウエルズの小説観」『関西英文学研究』第 12 号、2019 年、17–22 頁。
斎藤彩世「*In the Cage* における流動性の美学」『北海道アメリカ文学』第 37 号、2020 年、7–28 頁。
砂川典子「『ある婦人の肖像』とベラスケス「王女マルガリータ」——ヘンリー・ジェイムズとスペイン」『比較文化研究』No. 140、2020 年、99–109 頁。
砂川典子「世紀転換期のニューヨーク——アメリカ文学における摩天楼の表象」『紀要 VISIO』第 50 号、2020 年、35–40 頁。
中井誠一「“The Altar of The Dead”と『緑色の部屋』の〈死者への敬い〉と〈許し〉——原作とアダプテーションの差異」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第 15 号、2020 年、11–23 頁。
中川優子「『アリス・ジェイムズの日記』とヘンリー・ジェイムズ」『英語文学の諸相——立命館大学英米文学会論集』立命館大学英米文学会編、金星堂、2020 年、128–47 頁。
Nabae, Hitomi. “Translation and Globalization: Henry James Studies in Japan.” *Jamesian Cultural Anxiety in the East and West: The Co-Constitutive Nature of the Cosmopolite Spirit*, edited by Choon-Hee Kim, Cambridge Scholars Publishing, 2020, pp. 142–67.
Mizuno, Naoyuki. “A Report from Field Investigation: The James Family in Ireland.” *Irish Literature in the British Context and Beyond: New Perspectives from Kyoto*, edited by Hiroko Ikeda and Kazuo Yokouchi, Peter Lang, 2020, pp. 71–78.
竹井智子「ヘンリー・ジェイムズの「ビロードの手袋」と孤独な共存」『テクストと戯れる——アメリカ文学をどう読むか』高野泰志、竹井智子編、松籟社、2021 年、147–69 頁。
Nakamura, Yoshio. “Origins of Henry James, the Dramatist: Reflections on His Early Plays.” 『回帰する英米文学』高橋美帆、瀧川宏樹編、大阪教育図書、2021 年、249–63 頁。
Nabae, Hitomi. “Creating a Home Theater: Voice and Intimacy in Henry James.” *The Henry James Review,* vol. 42, no.1, 2021, pp. 31–40.
松井一馬「『ああ、黄金の盃は砕け散った！』——エドガー・アラン・ポーを書き換えるヘンリー・ジェイムズ」『中央学院大学人間・自然論叢』第 50 号、2021 年、241–61 頁。

４．エッセイ・文学書・辞書など

Kitahara, Taeko. “Exotic Travel to Italy and Japan: Henry James and Isabella Bird.” *Proceedings: Jamesian Cultural Anxiety in the East and in the West*, edited by The Henry James Society of Korea, 2017, pp. 229–35.
齊藤園子「書簡から見る Henry James のローマ——在欧アメリカ人によるヨーロッパ表象」『日本英文学会九州支部第 69 回大会 Proceedings』2017 年、327–28 頁。
Beppu, Keiko. “Transcribed, Translated, Transplanted: with Professor Keiko Beppu on James Studies in Japan.” Interview by Prof. Dorota Guttfeld, *Litteraria Copernicana*, no. 21, 2017, pp. 187–93.
松井一馬「マルタの『鳩』」『三田評論』2019 年 8・9 月号、2019 年、99 頁。
北原妙子「『ある婦人の肖像』から『ロデリック・ハドソン』へ」『行方昭夫先生米寿記念文集』河島弘美、西川健誠編、2020 年、81–82 頁。
小島尚人「まじめが肝心」『松柏社 Web マガジン』2020 年。
齊藤園子「Henry James によるおとぎ話の書き換え——*Watch and Ward* におけるマリッジ・プロット」『日本英文学会第 92 回大会 Proceedings』2020 年。
齊藤園子「Henry James の国際テーマの作品における『アメリカン・コロニー』の役割」『日本英文学会第 93 回大会 Proceedings』2021 年。
水野尚之「ヘンリー・ジェイムズ『大使たち』」『深まりゆくアメリカ文学』ミネルヴァ書房、2021 年、82–83 頁。

5. 書評

藤吉知美「『ヘンリー・ジェイムズ、いま——歿後百年記念論集』」『中・四国アメリカ文学研究』第 54 号、2018 年、29–31 頁。

中川優子「ヘンリー・ジェイムズのリアリズムをめぐって Alfred Habegger: *Gender, Fantasy and Realism in American Literature*. Columbia UP, 1982. xiii+378 pp.」『英文學研究　支部統合号』XIII、2020 年、187–90 頁。

6. 学位論文

Matsuura, Megumi. *Henry James on Ethical Questions within the Process of Globalization*. 博士（人文科学）、お茶の水女子大学、2017 年。

Takei, Tomoko. *From Nowhere to Everywhere: The Inbetweenness in Henry James's Works after the New York Edition*. 博士（人間・環境学）、京都大学、2020 年。

日本ヘンリー・ジェイムズ協会
第 1 回年次大会プログラム

日時：2021 年 8 月 28 日（土）13：00〜18：00
8 月 29 日（日）10：00〜14：00
オンライン（Zoom）開催

8 月 28 日（土）

1.　開会の辞

会長　水野尚之

2.　挨拶

別府惠子・海老根静江

3.　研究発表（13：40〜14：20）
「*In the Cage* と同時代の電信物語――階級の壁と想像力」

斎藤彩世（司会：藤吉知美）

4.　研究発表（14：30〜15：10）
「助手席にヘンリーを乗せて――作家ウォートンのキャリア構築におけるジェイムズの役割と位置づけ」

吉野成美（司会：石塚則子）

5.　講演（15：30〜16：10）
「ヘンリー・ジェイムズ研究会の設立を振り返って！」

里見繁美（司会：町田みどり）

6.　読書会（16：30〜18：00）
"The Patagonia" (1889)

（進行：竹井智子）

8 月 29 日（日）

1.　特別講演（10：00〜12：00）
"Playing with Thinking in Alice, William, and Henry James"

Dr. Jane F. Thrailkill
司会／ディスカッサント　難波江仁美
ディスカッサント　中川優子

2.　総会（13：00〜14：00）

3.　閉会の辞

副会長　町田みどり

****

Dr. Jane F. Thrailkill
Jane F. Thrailkill is Bank of America Honors Term Distinguished Professor at UNC-Chapel Hill. Specializing in American literature and health humanities, she publishes widely on the connections among literary study, the sciences, medicine, and philosophy. Her books are *Affecting Fictions: Mind, Body, and Emotion in American Literature Realism* (Harvard UP, 2007) and *Philosophical Siblings: Varieties of Playful Experience in Alice, William, and Henry James* (UPenn Press, 2021).

****

2021 年度会費納入のお願い

事務局から口座開設のお知らせです。

〇郵便局振替口座

口座番号：00250－4－98614

口座名称：日本ヘンリー・ジェイムズ協会

〇郵便局以外の金融機関からお振込みの場合は下記情報をご利用ください。

ゆうちょ銀行（金融機関コード：9900）

店名：029（ゼロニキュウ）店

口座：当座　0098614

口座名称：日本ヘンリー・ジェイムズ協会

〇会費

普通会員　3,000 円　　学生会員（博士課程まで）　2,000 円

〇振込用紙は青いものをお使いになり、手数料はお振込み人にてご負担ください。

—•—•—•—•—•—

Henry James Society 国際学会のお知らせ

Henry James Society: 9th International Conference, Kyoto, Japan

テーマ：Community and Communicability

期間：2022 年 7 月 6 日（水）～9 日（土）

場所：京都　ガーデンパレス　<https://www.hotelgp-kyoto.com/>

論文応募日程、参加申込み日程、宿泊情報については、10 月ごろに Henry James Society の HP:<https://centerforhenryjamesstudies.weebly.com/conferences.html> に掲載されます。

掲載情報については、日本ヘンリー・ジェイムズ協会の HP <https://hjsj.jimdofree.com/> でもお知らせいたします。

なお、国際学会の申込み、参加費支払い、宿舎予約情報等は、日本ヘンリー・ジェイムズ協会ではなく、Henry James Society の京都国際学会特設 HP より手続きをしていただくことになります。

基調講演、研究発表のほか、ランチ、懇親会、遠足など国内海外の研究者の交流が楽しく行われるように企画していきます。

会員のみなさまのご協力を仰ぎたく、是非積極的なご参加をお願いいたします。

—•—•—•—•—•—

編集部からのお願い

会員の皆様から書誌情報、その他の掲載情報を募集します。

書誌は、ジェイムズ研究をはじめ、ジェイムズの隣接分野や関連する作家（Wharton, Howells 等）についての論文、翻訳、エッセイなどの情報をお寄せ下さい。

今号に載せられなかった、没後百年記念論集（2016 年）以降にご発表のジェイムズ研究の書誌情報もお待ちしております。

掲載をご希望の方は、次の編集部専用アドレスまで、メールで情報をお寄せくださいますようお願いいたします。＜メールアドレス：hjsj.newsletter@gmail.com＞

—•—•—•—•—•—

住所登録のお願い

Henry James 協会では、 8 月 29 日（日）開催の第 1 回年次大会の総会にて承認されました通り、 会員の皆様の住所を会員名簿に登録させていただく予定です。名簿は事務局で管理し、会の運営目的以外には利用しません。会員の皆様のご住所は、会費を納入される際に振込用紙に記載された情報を登録させていただく予定です。ご住所の登録を望まれない場合、また、ご自宅ではなく、所属先のご住所の登録を希望される場合には、所属先も記載のうえ、名本達也（事務局会計）【namotot(at)cc.saga-u.ac.jp】までご連絡下さい。住所登録をしていなければ、協会が印刷物を紙媒体で発行した場合に、これらがお手元に届かなくなることをご了承下さい。

総会では、「住所登録に関する届け出先は、事務局へ」とお願いしておりましたが、事務処理上の問題で、連絡先を変更させていただいております。

＊メールアドレスの「(at)」は「@」に置き換えて下さい。

—•—•—•—•—•—

編集後記

この度発足した日本ヘンリー・ジェイムズ協会では、母体となったジェイムズ研究会の活動記録、会員の書誌情報、そして今後の予定などを読者にお知らせするためNewsletterを刊行いたします。創刊号では会長の水野尚之先生からご挨拶を、またジェイムズ研究会を長らく牽引してくださった海老根静江先生、別府恵子先生からご寄稿をいただき、大変ありがとうございました。先生方のジェイムズ研究への情熱を垣間見て、勇気づけられた方が多いのではないでしょうか。また会員の皆様から多くの書誌情報が寄せられ、2016 年の没後百年記念論集の企画以降も、ジェイムズ研究が継続・発展している様子が伝わります。来年の国際学会招致を前に、この Newsletter も本協会をさらに活性化する一助となれば、と願っております。次号は来年の国際学会開催時に刊行予定です。

（北原妙子）

日本ヘンリー・ジェイムズ協会事務局
〒756-0884 山口県山陽小野田市大学通 1-1-1
山口東京理科大学　堤研究室
https://hjsj.jimdofree.com/